

令和8年3月3日（火）

# つながる アートプロジェクト 実施報告書

～遠く、異なる環境に暮らす子供たちが出会う、  
オンライン美術交流～

株式会社 ANA 総合研究所  
地域連携部 研究員 大西佐知子

## 目次

1. 本交流の目的	2
2. 実施概要	2
3. 授業の様子	3
4. アンケート結果と成果の分析	4
5. 教職員による評価と教育課程への示唆	10
6. おわりに（本事業のまとめ）	11
【付録】生徒たちの声（自由記述）	12

## 1. 本交流の目的

### (1) 交流実施における社会的背景

特別支援学校学習指導要領に基づき、障害のある子供たちが地域の人々と触れ合い、社会性を育む「交流及び共同学習」を計画的に行うことが求められています。本プロジェクトは、最新のICT技術と美術の創造性を組み合わせることで、従来の対面交流の困難さを克服し、より深い他者理解を促進する新たなモデルとして位置づけられます。

### (2) 地域格差を越えた「相互補完」と教育の機会均等

遠隔地の過疎化が進む地域の学校と、都市部（首都圏）の学校をオンラインで結ぶことは、教育の質を向上させる以下の意義を有します。

- 遠隔地（安平町）側：同年代の集団が固定化されやすい小規模校において、多様な生徒と交流することで社会的視野を広げ、新たな価値観に触れる刺激を創出する。
- 都市部（臨海青海）側：安平町の豊かな自然や文化（雪、デゴイチ、菜の花等）を、現地の生徒による「おもてなし」を通じて疑似体験し、多角的な国土理解と地域を尊重する態度を養う。

### (3) 美術科・造形活動を介する意義

直接的な言語コミュニケーションのみに頼らず、「アバター（分身）」という造形物を媒体とすることで、自己投影や非言語による共感を生み出し、心理的障壁の低い交流を実現します。

## 2. 実施概要

- 実施日：第1回 2月6日 / 第2回 2月27日
- 参加校：安平町立追分中学校（2年生）、早来学園（後期課程）、東京都立臨海青海特別支援学校（中学部2年生）
- 主な内容：
  - 事前準備：学校紹介動画の作成および鑑賞
  - 第1回：自己紹介および粘土によるアバター制作  
  
アバターを互いの学校へ郵送
  - 第2回：届いた相手のアバターを、自校の「おすすめスポット」で撮影、その成果を発表・共有

### 3. 授業の様子



追分中学校 美術室の様子



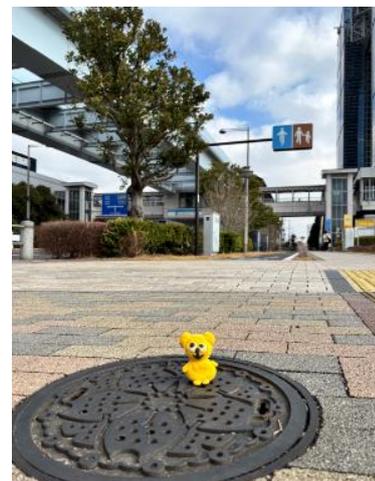
臨海青海特別支援学校 技術室の様子



各校のアバター撮影と発表の様子



臨海青海特別支援学校 作品展での紹介



## 4. アンケート結果と成果の分析

### (1) 安平町立中学校：第1回アンケート結果の分析

#### 1. 交流の雰囲気 (Q1)：

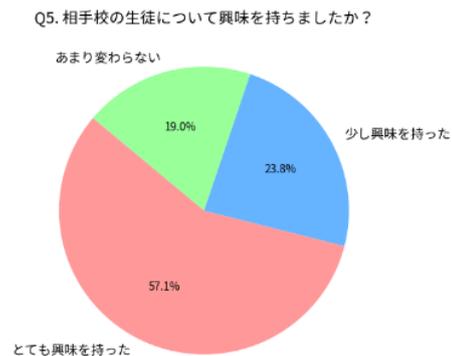
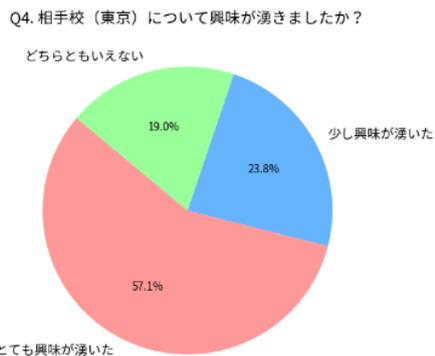
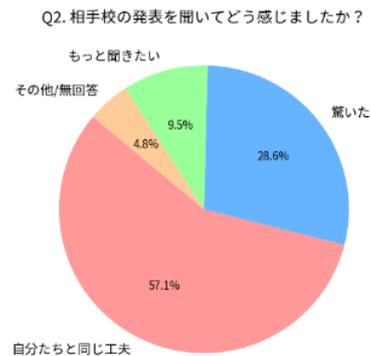
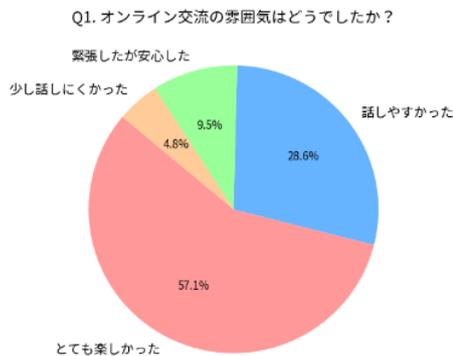
- 85.7% の生徒が「とても楽しかった」「話しやすかった」と回答し、初めてのオンライン交流が非常に和やかに進行したことが分かります。
- 「緊張したが安心した (9.5%)」を含めると、ほぼ全ての生徒が肯定的な印象を持ってスタートしました。

#### 2. 相手校の発表への反応 (Q2)：

- 71.4% という圧倒的多数の生徒が「自分にはないアイデアや表現に驚いた」と回答しており、アートを介した交流が強い刺激を与えたことが示されています。
- 「自分たちと同じ工夫を感じた (23.8%)」という共感の視点も生まれており、他者との共通点と相違点の両面から学びがありました。

#### 3. 相手校・地域への興味 (Q4/Q5)：

- 東京（臨海青海特別支援学校）やその生徒たちについて、「とても興味が湧いた/持った」生徒が 57.1% に達しました。
- この時点ですでに半数以上の生徒が、次回の交流や「アバターの旅」に対して強い期待感を抱いていることが確認できます。



### (2) 臨海青海特別支援学校：第1回アンケート結果の分析

#### ● 交流と制作の充実感 (問1・問2)：

- 91% (10名) が「楽しかった」、さらに 91% (10名) がアバターを「よくできた」と回答しています。
- 自己表現に対して高い達成感を持っており、このポジティブな自己評価が、後の安平町へのアバター郵送という「自分を拓く」行動の土台となっています。

#### ● 他者への気づき (問3)：

- 「かたちがおもしろかった (6名)」「じぶんと違っておどろいた (2名)」など、自分と異なる表現を肯定的に捉える視点が育まれています。

- 期待感（問4）：
  - 「とても楽しみ」「楽しみ」「ドキドキする」と、全員が自分の分身が北海道を旅することに、期待と適度な緊張感を持って臨んでいることがわかります。

### (3)安平町立中学校：第2回アンケート結果の分析

#### 1. 活動の満足度（Q1）：

活動全体としては非常に高い満足度（約96%が肯定的回答）を得ましたが、1名の生徒から「少し難しかった」という意見が寄せられました。

これに関連し、教員アンケートでも「オンライン交流当日の撮影は時間的に厳しかった」という指摘や、「知的学級の生徒にとってはその場での即応が難しい場面があった」という課題が挙げられています。

#### 今後の改善案：

- 事前準備の拡充： 交流当日の混乱を防ぐため、事前に撮影場所の候補を絞り込むなどの「見通し」を立てる支援を強化する。
- 時間設定の柔軟化： 撮影期間を当日の時間内だけでなく、数日間の幅を持たせることで、個々の生徒が納得いくまで取り組める環境を整える。

Q1. 今回の活動（写真撮影）について（修正版）



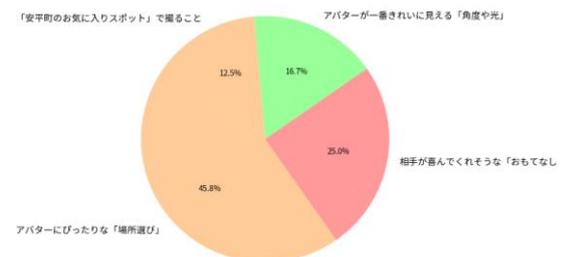
#### 2. おもてなしの心の深化（Q2）

撮影時に最も大切にしたこととして、「アバターにぴったりの場所選び（45.8%）」に加え、「相手が喜んでくれそうなおもてなしの気持ち（25%）」が挙げられました。これは、美術作品（アバター）を媒介に、遠く離れた相手を具体的に思いやる「他者視点」が育まれたことを示しています。

#### その他の意見

- 遊び心を持つこと
- アバターの外見なのを気にして、そのキャラクターのあった場所などみつけるのがとても楽しかったです。
- 違う学校の人々が作ったアバターを撮影することで、場所探しなどをいっぱいして、より良い一枚の写真を撮ることができました。

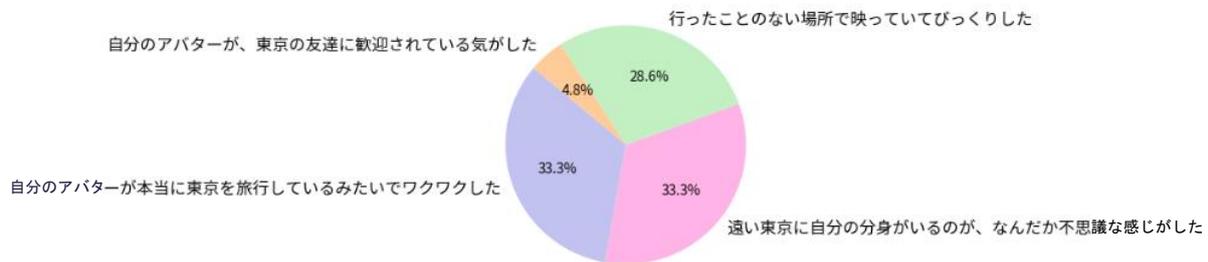
Q2. 相手のアバターを撮影するとき大切にしたこと



#### 3. 距離を超えた繋がりの実感（Q3）

この質問は、郵送した自分の分身（アバター）が遠隔地を旅している姿を、オンライン上で再確認した際の生徒の心情を捉えたものです。

### Q3. 自分のアバターが東京にいるのを見て、どう思いましたか？



- ・ 「旅をしているみたいでワクワクした」 (33.3%)
- ・ 「遠い東京に自分の分身がいるのが、なんだか不思議な感じがした」 (33.3%)
- ・ 「東京の有名な場所に自分の作品が立っていて嬉しかった」 (33.3%)
- ・ 自分のアバターが東京で撮られていて、しかもすごく綺麗に写っていて自分も嬉しかったし、アバターも嬉しかったんじゃないかと思いました。

各回答が均等に分かれており、生徒一人ひとりが「ワクワク感」「不思議な感覚」「達成感・誇らしさ」といった多面的なポジティブ感情を抱いていることがわかります。単なる作品交流に留まらず、自分の分身が「物理的な距離を超えて移動した」という実感が、生徒たちの心に深く刻まれたことを示しています。

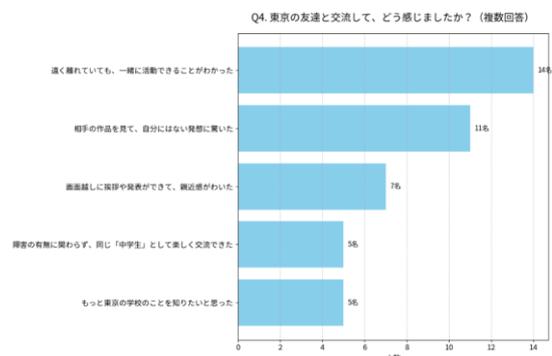
### その他の意見

- ・ 自分のアバターが東京で撮られていて、しかもすごく綺麗に写っていて自分も嬉しかったし、アバターも嬉しかったんじゃないかと思いました。
- ・ 自分はコロナになってしまい、アバターを作ることはできませんが、こちらにきた、アバターを撮影するのはとてもよいたいけんになり、とても有意義な時間になりました。

## 4. 交流して感じたこと (Q4)

この項目は、2回の交流を終えた生徒たちが、相手校の生徒に対してどのような印象や実感を抱いたかを多角的に集計したものです。

- ・ 「遠く離れていても、一緒に活動できることがわかった」 (14名)
  - 本プロジェクトの最大の成果であり、ICT活用が物理的距離を克服したことを最も多くの生徒が実感しています。
- ・ 「障害の有無に関わらず、同じ『中学生』として楽しく交流できた」 (10名)
  - 「特別支援学校の生徒」という属性を超え、同年代の仲間としての共感が育まれたことを示しています。
- ・ 「もっと東京の学校のことを知りたいと思った」 (10名)
  - 交流を通じて、相手の住む地域や環境に対する継続的な関心が引き出されました。
  - 「直接会って、もっとお話ししたいと思った」 (8名)
  - オンラインでの出会いが、リアルな対面交流へのポジティブな意欲へと繋がっています。



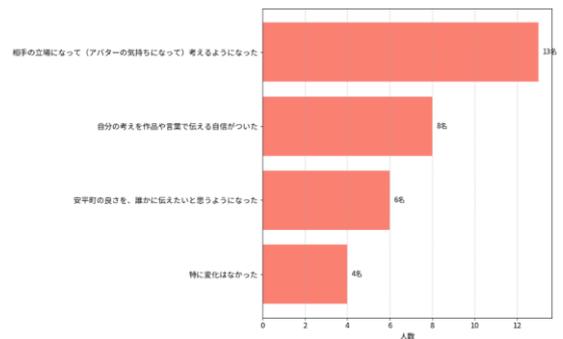
## その他

- ・アートを通じて普段は合えない人に関わることに幸せを感じた。
- ・離れていても交流できて、初めての経験だった。
- ・とても面白く、想像が幅広くできるキャラクターを作っただきありがとうございました。

## 5. プロジェクトを通じた生徒自身の変化(Q5)

この設問は、2回の交流活動（アバター制作、郵送、撮影、発表）を終えた生徒たちが、自分自身の内面的な成長や意識の変化をどう捉えているかを示す、本プロジェクトの最重要成果の一つです。

Q5. プロジェクトを通して、あなた自身の変化はありましたか？（複数可）



- 他者への共感能力の向上（13名）：
  - 最も多かった回答は「相手の立場になって（アバターの気持ちになって）考えるようになった」でした。
  - 届いたアバターを「どこで撮れば相手が喜ぶか」と試行錯誤する「おもてなし」のプロセスが、相手の心情を想像する訓練として機能し、深い共感性の獲得に繋がったと言えます。
- 自己表現への自信の獲得（8名）：
  - 「自分の考えを作品や言葉で伝える自信がついた」という回答が次いで多く、美術を通じた非言語・言語を組み合わせた発信が、生徒の自己肯定感を高めたことを示しています。
  - 教員側の観察でも「自分の考えを伝えたり、友達の感想を聞いたりして、表現方法を工夫できるようになった」と評価されており、生徒の自覚と指導者の評価が一致しています。
- 郷土愛の再発見（6名）：
  - 「安平町の良さを、誰かに伝えたいと思うようになった」という変化が見られました。
  - 東京の生徒（外部の視点）に向けて地元の魅力をアピールする活動が、当たり前だと思っていた地元の良さを再認識するきっかけとなりました。
- 変容の少なさ（4名）：
  - 「特に変化はなかった」と回答した生徒も少数（4名）存在します。これについては、教員アンケートにある「知的学級の生徒は苦手な部分が多く、その場での対応が難しい場合がある」といった、個々の実態に合わせたさらなる支援の必要性を示唆しています。

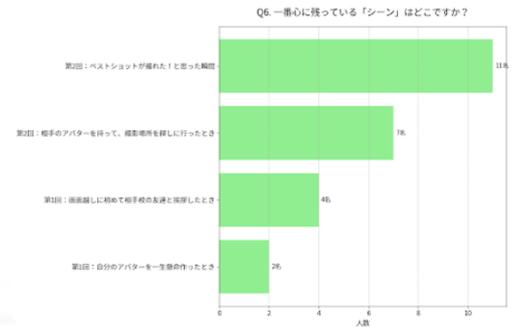
## その他

- ・全く、緊張はしませんでした。キャラクターにあった場所、そして背景などよく考えた。よく考えて、撮影する能力が、成長したと思います。

## 6. 一番心に残っている「シーン」(Q6)

### ・「最高の一枚」への達成感 (11名)

最も多かったのは「第2回：ベストショットが撮れた!と思った瞬間」でした。これは、単なる作業としての撮影ではなく、Q2で示された「おもてなしの心」や「場所選びのこだわり」が結実し、自分自身が納得できる表現に到達した瞬間の喜びが非常に大きかったことを物語っています。



### ・ プロセスそのものへの没入 (7名)

次に多かったのは「第2回：相手のアバターを持って、撮影場所を探しに行ったとき」です。結果だけでなく、「相手のために町を歩き、視点を変えて風景を再発見する」という探索的なプロセスそのものが、生徒たちの記憶に深く刻まれています。

### ・ オンラインによる「出会い」のインパクト (4名)

「第1回：画面越しに初めて相手校の友達と挨拶したとき」を選んだ生徒も一定数存在します。遠隔地の学校と繋がるという「非日常的な体験」のスタート地点が、生徒たちにとって新鮮な驚きであったことが伺えます。

### ・ 制作を通じた自己表現 (2名)

「第1回：自分のアバターを一生懸命作ったとき」という、造形活動の原点を挙げた生徒もいます。全ての交流の土台となった「分身作り」への愛着が、最後までプロジェクトを支える原動力となっていました。

### ・ その他

普段関わることのない方達と関わることができ、斬新だった。

## (4) 臨海青海特別支援学校：第2回事後アンケート詳細分析

### 1. 交流の総括：100%の「たのしかった」という達成感

- ・ データ (問1)： たのしかった：11名、ふつう：0名、むずかしかった：0名
- ・ 分析： 全生徒が「たのしかった」と回答しており、オンライン交流や写真撮影という非日常的なイベントが、生徒たちにとってポジティブな体験となっていることを示しています。画面越しの対面だけでなく、事前に送ったアバターが「実際に北海道にいる」という実感が、この満足度を支えています。

### 2. 制作と発信への自信：自己肯定感の向上

- ・ データ (問2)： よくできた：8名、まあまあできた：1名、むずかしかった：2名
- ・ 分析： 約73%の生徒が「よくできた」と回答しています。これは、自分のアバターが北海道の景色の中に置かれているのを見て、「自分の作ったものが風景に似合っている」とい

う自己肯定感の再認識に繋がったと考えられます。一部（2名）の「むずかしかった」という声は、撮影のフォローアップの必要性を示唆しています。

### 3. アバターを介した「擬似体験」の質（問3・問4）

- データ：北海道にいるアバターを見て：うれしかった（7名）、ワクワクした（3名）写真の中のアバターの様子：たのしそう（8名）、ドキドキしているみたい（2名）
- 分析：「アバター＝自分自身」という投影です。安平町の生徒が「おもてなし」の心で撮影した写真を見て、多くの生徒がアバターを「たのしそう」と感じ、自分自身も「うれしかった」と答えています。これは、直接言葉を交わさずとも、写真という「表現」を通じて安平町の生徒たちの優しさや配慮が、生徒たちに伝わったことを意味しています。

### 4. 継続への意欲と相手への称賛（問5・問6）

- データ：また一緒に活動したい：したい（9名）、わからない（2名）友達に伝えたいこと：写真、じょうずだね！（5名）、ありがとう・また会おうね（各2名）
- 分析：「写真、じょうずだね！」という称賛が最も多かったのは、生徒がモニターを注目して鑑賞できていたことを示しています。約82%の生徒が「また活動したい」と回答しており、このプロジェクトで「他者への関心」増し、「社会参加への意欲」を育むことにつながったと言えます。

## (5) アンケート結果に基づく成果分析

### 1. 安平町側：おもてなしの心と繋がりの実感

- 満足度と主体的行動：約96%が活動に肯定的であり、「おもてなしの心」を重視した生徒が25%に達しました。
- 心の変容：「相手の立場になって（アバターの気持ちになって）考えるようになった（45.8%）」という回答が最も多く、共感性の向上が表れています。

### 2. 臨海青海側：自己肯定感の向上と他者受容

- 交流への意欲：全員（11名）が「たのしかった」と回答し、9割以上の生徒が自分の制作物に自信をもっています。
- 北海道への愛着：自分のアバターが北海道にいるのを見て「うれしかった」と答えた生徒が最多（7名）で、写真の中のアバターが「たのしそう」に見えると回答した生徒も多く、遠隔地への心理的距離が大幅に縮まりました。

## (6) 考察：アートが繋いだ「心の越境」

安平町の生徒が「おもてなしの心」で撮影に臨み（Q2）、東京の生徒がそれを見て「自分のアバターが楽しそう」と感じた（Q4）という連鎖は、本プロジェクトの核心的な成果です。「作品（アバター）」を介したワクワク感が、最終的に「人としての繋がり（また一緒に活動したい 82%）」にという気持ちにつながることができました。

## 5. 教職員による評価と教育課程への示唆

教職員による事後アンケートおよび行動観察の結果、本プロジェクトは単なるイベントを超え、生徒の非認知能力を育む確かな教育実践として評価されました。

### (1) 成果：アバターを介した「心理的安全性」と相互理解

- 対人緊張の緩和と交流の深化：直接的な対面では緊張しがちな生徒にとって、アバターという「分身」を介した交流は心理的なクッションとなり、対人緊張を和らげる効果が確認されました。
- 行動の変容（非認知能力の向上）：「回を追うごとに挨拶やリアクションが自然になった」との報告があり、事前学習から学校紹介動画を鑑賞する等、継続的な関わりがコミュニケーションの質の向上に寄与しました。
- 共感性の高まり：「他校の生徒の発表を、自分事として真剣に聞く姿」が多くの教員によって観察されており、他者への関心が育まれたことが実証されました。

### (2) 今後の課題：運営の最適化と個別支援の充実

- 時間管理の難しさ：「オンライン交流当日の撮影時間は極めてタイトであった」という指摘があり、授業時数の確保が必要でした。今回のように年度が始まってからの企画提案では授業時間の確保は極めて難しい現状があります。特に、特別支援学級は複数学年の集団であるため、時間割等の調整に課題が残りました。
- 実態に応じた柔軟な計画：知的障害特別支援学級および学校の生徒において、「その場での即時的な対応が難しい」あるいは「他校の生徒に支援の様子を見られることを気にする」といった実態も報告されました。
- 改善案：事前の学習（撮影場所の下見）の徹底や、撮影期間に数日間の幅を持たせるなど、時間割と指導計画のさらなる最適化が必要です。

### (3) 教育課程における位置づけと継続性（総括）

- 教科横断的な展開：本プロジェクトは美術科の枠を超え、「生活単元学習」や「総合的な学習の時間」における全体計画と連携させることで、より充実した活動になるとの評価を得ました。
- 地域間連携の有効なモデル：都市部と過疎地を繋ぐICT活用モデルとして「極めて有効」かつ「非常に親和性が高い」と総括され、次年度以降の「継続が強く望まれる」との結論に至りました。

## 6. おわりに（本事業のまとめ）

本事業「つながるアートプロジェクト」は、ICTを活用した遠隔地間交流に「美術」という表現活動を取り入れることで、これまでのオンライン交流では難しかった「心の深い繋がり」を生み出すことができました。全2回の活動を経て得られた成果と、今後の展望を以下にまとめます。

### (1) アバターが繋いだ「相手を想う心」

今回の交流の大きな特徴は、自分の分身である「アバター」を相手に託したことです。

- 安平町の生徒は、届いたアバターを自分の町の名所に連れて行き、「どうすれば相手が喜んでくれるか」を一生懸命に考えて撮影しました。
- 臨海青海の生徒は、その写真を見て「自分の一部が大切にされている」と感じ、北海道への親しみと、安平町の皆さんへの感謝の気持ちを抱きました。言葉だけでは伝わりにくい「思いやり」が、美術作品を通じてしっかりと手渡された瞬間でした。

### (2) 障害や距離を越えた「共生社会」の実現

アンケート結果からも分かるように、生徒たちは「障害の有無に関わらず、同じ中学生として楽しく活動できた」と実感しています。アバターという「分身」を介することで、緊張感が和らぎ、お互いの良さを認め合える「心理的な安心感」が生まれました。これは、これからの多文化共生社会を担う子供たちにとって、非常に大切な成功体験になったと確信しています。

### (3) 未来へ向けた継続的な取り組み

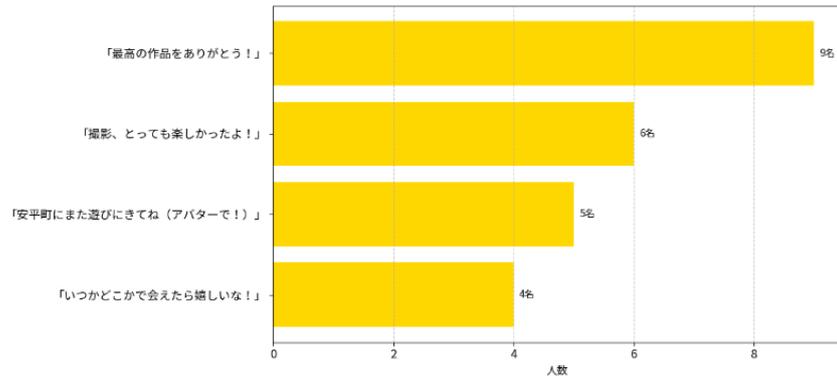
教職員の皆様からも、「子供たちが他者の発表を自分事として真剣に聞くようになった」といった成長を喜ぶ声や、本事業の継続を望む強い期待が寄せられています。今後は、今回の課題であった「撮影時間の確保」や「一人ひとりのペースに合わせた支援」をさらに充実させ、この活動をより発展させていきたいと考えています。

結論として、本事業は都市部と遠隔地を結び、子供たちの「心のバリアフリー」を実現する革新的な教育実践となりました。今後も、各自治体の教育施策の大きな柱として、継続し発展させていく価値が十分にあるものと総括いたします。

## 【付録】生徒たちの声

## 安平町からのスタンプ

Q7. 東京の友達へ送る「一言スタンプ」



## (自由記述)

- とても撮影するときに面白く、こういう、自分なりに想像できる機会がとてもよく、自分の成長に良い時間でした。こういう時間は好きです。

## 臨海青海からのメッセージ

交流の気持ち：ひとつに○をつけてください。

- オンライン交流は どうでしたか？  
 たのしかった！  ふつう  むずかしかった
- 写真は、うまくとれましたか？  
 よくできた！  まあまあできた  むずかしかった
- じぶんのアバターが、北海道にいるのを見て どうおもいましたか？  
 ワクワクした！  びっくりした！  うれしかった！
- 写真のなかの アバターはどうみえましたか？  
 たのしそう  かっこいい・かわいい  どきどきしているみたい
- 北海道の友達と、またいっしょに活動したいですか？  
 したい！  したくない  わからない
- 北海道の友達に、伝えたいことはありますか？  
 「ありがとう！」 「写真、じょうずだね！」 「また会おうね！」  
 じゆうに書いてください。

たのしかった

交流の気持ち：ひとつに○をつけてください。

- オンライン交流は どうでしたか？  
 たのしかった！  ふつう  むずかしかった
- 写真は、うまくとれましたか？  
 よくできた！  まあまあできた  むずかしかった
- じぶんのアバターが、北海道にいるのを見て どうおもいましたか？  
 ワクワクした！  びっくりした！  うれしかった！
- 写真のなかの アバターはどうみえましたか？  
 たのしそう  かっこいい・かわいい  どきどきしているみたい
- 北海道の友達と、またいっしょに活動したいですか？  
 したい！  したくない  わからない
- 北海道の友達に、伝えたいことはありますか？  
 「ありがとう！」 「写真、じょうずだね！」 「また会おうね！」  
 じゆうに書いてください。

また会おうね

交流の気持ち：ひとつに○をつけてください。

- オンライン交流は どうでしたか？  
 たのしかった！  ふつう  むずかしかった
- 写真は、うまくとれましたか？  
 よくできた！  まあまあできた  むずかしかった
- じぶんのアバターが、北海道にいるのを見て どうおもいましたか？  
 ワクワクした！  びっくりした！  うれしかった！
- 写真のなかの アバターはどうみえましたか？  
 たのしそう  かっこいい・かわいい  どきどきしているみたい
- 北海道の友達と、またいっしょに活動したいですか？  
 したい！  したくない  わからない
- 北海道の友達に、伝えたいことはありますか？  
 「ありがとう！」 「写真、じょうずだね！」 「また会おうね！」  
 じゆうに書いてください。

ありがとう

交流の気持ち：ひとつに○をつけてください。

- オンライン交流は どうでしたか？  
 たのしかった！  ふつう  むずかしかった
- 写真は、うまくとれましたか？  
 よくできた！  まあまあできた  むずかしかった
- じぶんのアバターが、北海道にいるのを見て どうおもいましたか？  
 ワクワクした！  びっくりした！  うれしかった！
- 写真のなかの アバターはどうみえましたか？  
 たのしそう  かっこいい・かわいい  どきどきしているみたい
- 北海道の友達と、またいっしょに活動したいですか？  
 したい！  したくない  わからない
- 北海道の友達に、伝えたいことはありますか？  
 「ありがとう！」 「写真、じょうずだね！」 「また会おうね！」  
 じゆうに書いてください。

たのしかった



This page intentionally left blank.

This page intentionally left blank.